

# 中国情報

中 嶋 嶺 雄

この夏以来、中国で高まっている孔子批判・始皇帝評価キャンペーンは「人民日報」や「紅旗」紙誌上でのプレス・キャンペーンから、さらに進んで、広範な大衆運動にまで発展している。そのような笑先、中国哲学史界の大御所、馮友蘭（ひょう・いうらん）の「自己批判」

（光明日報）  
十二月三日  
付）が伝え

## 「尊法反儒」の意味

「尊法反儒」を単純するポルタージのハイキャンペーンが進められているわけだが、これらの論議がすべて林彪批判と結びつけられて展開されているとはいえない。「孔子を尊んだ林彪」「焚書坑儒をのりつた林彪」「現代中国の孔子・林彪」といったしである。

林彪批判のために孔子批判が必要なのだ、といっているのだが、そもそも文化大革命や林彪批判でも、始めから特定の個人が明示されることはなかったから、このような弁護は意味をなさな

## 深刻な事態の反映？

れ、一方では、  
法家を重んじ  
焚書坑儒を断  
行した始皇帝

中で極度に孤立しており、大層にはなんの影響もない」というのなら、なぜこのようなキャンペーンをのりつて林彪批判に結びつけて、こつと大々的に行つて必要があるのだろうか。

ことへの批判とみられる。文脈についてはどう解釈すべきなのか、といった点をもちと突っ込んで分析すべきであろう。

がさらに大がかりに賞讃されており、様相は、あたかも文化大革命初期の状況に類似してきている。  
このことについては先陣日の本紙「世界をえぐる」で、大森実氏も評議されていたが、「こ」では私の見解をのべたい。

例によって、日本の新聞の多くは、今回の孔子批判が劉少奇、林彪を批判したと云のように、特定の個人に向けられたものでない旨を、しきりに解説している。林彪批判など有り得ないことを主張して来た同じメディアが、こんどは、

「これまでの中国の例に照らしても、また、今回の一連のキャンペーンには、十全大会の王洪文報告同様、ナゾめいた台意の多い文脈があつてに散見される」とからしても、今回の「尊法反儒」のキャンペーンが意味するものは、かなり深刻な事態の反映であるような気がする。

（東京外大助教）